最優秀賞

ながめの息を

広島市立舟入高等学校　二年
藤井　志穂

するりとした一重の目
「お姉さんどこにいますか」
「おととしに百になって逝ってしまいました」
虎ががああと身もだえて
おじいちゃんの胃は千切れそうになった
きみがわるいんじゃないか
だいじなものを食べないでとっておくから
となりのロボットは　給油がわりにとっていってしまうもの
あいつらに味覚はないんだ
　ないんだから亜鉛あげようか
前あし後ろあし首しっぽ
ごりごりひきずるのみてられない
切れるよ
これはへんだ　おわったいとの端をむりにこまかくさいて
なにかべつのに繋げようとしてる
コード直接　橈骨動脈　に　ぎゅっぎゅっ

今の時代の接続は　無線　な　の　に　!!
かがやく毛並から放射する　ぶにっと　した熱
飛べよ　飛べ　飛べ　はやしたてられて
ぼくとしては屋上よりとなりに居てくれるのがいいのになあ
あさやひるのお日さまにてらされてまばゆくって
いくら目がつぶされそうになったかわからない
ゆうがたとよるのよわいひかりのなかで
とろけこみそうに
うっかり旨そうなんて　おもったりして

ハンドベイン
きみの伸ばした手が　空気のやわらかい玉にかきけされていく
かきけされたまま長生き、ポットのなかにおちていって
きみ　ぼくを食べてしまうんだね
ならせめてぼくが生きてるうちに
目のとどくところで食べておくれよ
きみの生きるすがたを
ぼくに　見せてくれないか

いのりはむなしく
迢空の日
けむりになって　いってしまった

大量に出てきたボルト

優秀賞

衷情

東京・女子学院高等学校　一年
奥田　由珠香

向かう夕日に目を細め、
疲れた靴音響かせる。
いつも通りの帰り道、
ふとした拍子に立ち止まる。

いつの間にやらそこにいた、
黒くて小さなカタマリが
膝の下から私を見上げた。

「背後に伸びる黒い影に、
お前は価値を見出せるか？

雑多に紛れて固まった地面に、
お前は柔い土を見出せるか？」

私は黙ってじっと見つめた。
それも私をじっと見た。

しばらくすると小さなそれは、
ゆっくり小さな口を開いた。
私は次の言葉を理解して、
聞きたくなくて逃げ出した。

少し走って振り返ったら、
それの姿は消えていた。
その時私が見たものは、
ただオレンジなだけの硬い地面。

優秀賞

ひと言ぶんの等星

北海道・立命館慶祥高等学校　一年
村上　陽香

ひんやりどっしり気持ちのいい、びんがあって。
そこに七色の
いや、七色どころじゃないや。
七百色とか、七万色とか、それくらい。
そう、それくらいたくさんの色の金平糖が、ぎっしり。
どれにしようか、
レモン色にしようか。
レモン色だなんて、気取りすぎ？
星を陽にきらめかせて
君に贈る色を探す。
あんず色あたりが無難かな。
でも無難だなんてつまらない。
あ、この、山吹色はどうだろう？
ああでもすみれ色も捨てがたいなあって。
地球が二回まわったころ
やっと選んだうすべに色。
手のひらにそっとふりだしたはずなのに、
思いがけず勢いづいた星。
慌てたそぶりを見せられなかった、
おくびょう者の僕。

あのさ、話を聞いてほしいんだ。

ゆっくりと振り向いた君に
余裕っぽくほほえんで、
指先でそっと
小さな星をつまむ。
君の柔らかいくちびるに、
うすべにが触れるその刹那。
心がとくんと跳ねた。

おいしい

って、
そうふわり、笑う君に、
思わずつむいだ笑みと吐息。

わたしも、
あなたに聞かせたい話があるの。

ああ、なんて甘いんだろう。
神様、いそいでください。
甘さが浮世に溶けないうちに。

佳作

窓に、アオ、咲え！

沖縄・N高等学校 沖縄伊計本校 一年
黒肱 奈乃子

急勾配を上がり、右に曲がれ。
そうしたら、あと、五百歩。
いつも通り、野良り、歩けば着くはずだった。

それが突然、
予告なく、土砂降りだした！

HITORI、
二人と早足が、駆け足に変わる。
私も体を傾け、走り出す。
教科書の角が背中を刺す。
水溜りが踊る。
葉が水滴を得る。

いつの間に、
私は腹を抱えて笑っていた。
笑いながら、走っていたんだ！

息は粗く、
五階の教室まで上がる。
横目にちらと見た、雨止み、鈍く眩しい空の延べり。
平台には、ぐたりのソックス、靡くシャツ。
「タイミング悪いにも程があるよね。」と咲い逢った。
部屋には、セイメイが漲っていた。

アオ空。窓に寄る。

シ界のうちに、白い線が描かれる。

飛行機雲だ。

キタイは、何処かへ消えた。

捕まえたくて、私も飛びたくて、飛んでしまいたくてっ…！

佳作

日常のトランスフォーメーション

埼玉県立浦和第一女子高等学校　二年
有泉　遥

ホームで電車を待ちながら、
前の人を観察します
汗を拭っているおじさんの
子どもの頃はどんなだろう
大学生のお姉さんは
なんでこの服を選んだのだろう
隣のこの子は今何を考えているのかな

ホームに電車がついたなら
ゾロゾロゾロゾロ進みます
下を向きながら乗りこみます
端っこの席をすばやくとって、
膝の上に英単語を広げます
電車の振動と膝の上の静かな暗号たちは
私の意識をふやかしていきます
広げたページを天井に見せながら
私はおもむろに携帯をとりだします

壁に体重を預けて
大きなあくびを一つすると、
車内アナウンスにいつもの名前が現れます
前の人が荷物を持ちます
立ちます
起きます
携帯をしまいます
動きだす人がいます

壁にもたれたまま私はこう思うのです
このまま電車に乗っていこうか
私の胸がザワザワします

佳作

淡々と

神奈川県立川崎高等学校　一年
薄衣　唯華

一つ年下の弟はいつも淡々と語る
今日も、自分に起きたことを淡々と
私はただ聞いているだけ
心にひそむ想いは見えない

弟のものはよくなくなり、よく壊れる
自らがやったのか、人がやったのか
ただ聞いているだけの私には分からない
弟は出来事だけを淡々と語るから

中学生になると私は弟と話さなくなった
しかも話しかけると喧嘩腰
私は何もしていない、悪くもない
だからこっちからも、話す気はない

見ているだけの私は決めつける
そういう時期だからと

あきらめ、話さず
想いは見えないふりをする
私にはわからないから

季節が一回りして
弟とまた少し話すようになった
あのアニメ面白い、このシーンすごい
なんて、くだらない話するときもあるが
でもまだ、時々イラッとする
たまに返事はするけれど、大体無視

一つ年下の弟はいつも淡々と語る
今日も見え隠れする少しの想いと一緒に
淡々と
私は笑いながら聞いている
その心にひそむ想いを見ながら

私はそれが嬉しい
少し彼をわかった気がして

佳作

さいわい

福岡県立修猷館高等学校　三年
瀬口　愛奈

かすかに空いている朝の窓
乳白色のカーテン　すきとおって
踊るひらひら、陽の光
完ぜん完ぺき　やさしい世界で眠りたい
枕に顔を埋めるいま
これがきっとそうなのね
目を閉じて、このまま
安らかにいなくなりたい

まぶたに映る光
階下で食器を鳴らす人
数ヶ月前にこぼしてしまったお味噌汁
あたたかい白米の匂い
でも、高菜はからい
けっきょく完ぜん完ぺきなものはないのかも
も一度まぶた開けて　のそのそ起きる
隣の鏡に映る瞳は揺れていた
風が吹く海のそばで買ったもの

からいは〝つらい〟けど
ほかほかご飯に合うのなら
それは確かに幸せ？
百円で手に入る、〝さいわい〟があればいいのに

佳作

骨と夢

埼玉県立鴻巣高等学校　三年
加藤　優奈

硝子を踏むこの足元が
冷たく優しい地面に沈む
この地を去った君や貴方は
土塊（つちくれ）の中に
瓦礫の中に
遺されたペンダントの中に
ひっそりと身を横たえている

消えた生命の損失分
この世に積もる悲しみは
夏の痛いほどの夕焼けや
誰かの胸に　揺蕩（たゆた）っている

乾いた道路の白昼の夢にも
途絶えた鼓動ばかりが
ぽつり　ぽつり　蠢いている

金箔を貼ったような雲に
名も知らぬ花の咲く地面に
もしも　この下に
貴方の亡骸があったなら

今　この世にあるものは
溶けて消え去った過去の夢
砂糖のような過去の夢

入選

淡色

東京・淑徳巣鴨高等学校　一年
吉永　博紀

彼の淀んだ網膜は色を映さない
ことに託けては過去の所為にする悪い癖

一寸先はライトグリーンの瑞々しい楽園
制汗剤の香りとこの春の薫りが
彼を惑わし、いずれ墜とす
皆を惑わし、いずれ糧となる
海馬の錆を落とせないのはどちらか

歪みがあると決めつけて
真っ新な心に漂白剤をぶち撒ける
少しでも影が差せば狂ったように己を白く染め上げる
無駄だった
知っていた

彼は青くなりたかった

入選

かくれんぼ

神奈川県立麻生高等学校　三年
矢田　安侑子

十がいつまで経っても越えられなくて
いつもあの青で足元を失くす
都合のよさの居場所を考えることだけは一人前で
私的な感情の在り処なんてなかったんだ

ポケットに空きがないからと
立ち上がったその思い出の向こうでは
ずぶ濡れの笑みが産声を上げる

ぶつけた頭の先からシャッター音がした
きっと心は殻なのに

入選

鏡の中から正しき声が手を伸ばす

東京・朋優学院高等学校　二年
野口　真絢

りありすむに浮かんだ猫の憂鬱、
せんちめんたるに溺れた兎の発
狂、
机の隅に並べられた言葉の残骸を
固め、
我が盲目で従順な語り草を嘲笑う
君。

私をして喉を鳴らせるのは何か？
鶏鳴に滲んだ露の流れと、
胸を冷やす感触と、
抑えきれない嘔吐感。

私は君が嫌いなわけではないので
しょう？
君の醜く捩じれた、
その厚くねっとりとした舌でもっ
て食む唇が、
私の高潔な劣等感に火傷を負わせ
ただけなのです、
干乾びた蚯蚓が私の中を這う心
地。

思えば私はとても正しい人間で
あったのです、
あの熱く蒸気する穴を掌で塞ぎた
い気持ちでいっぱいです、
ええ、

足元のたいるを気にせずにはいら
れなくて、
とうとう私の視界に空は上らな
かったけれども、
右腕を力強く当てたならば、
やはり左腕も当てないでは気が済
まない、
仲間外れは不幸の証。

混沌の疾患と秩序の台頭、
お前が貶め侮蔑し冒涜した私のし
なぷすを見ろ。

己の眼球に触れたときの焦燥と安
堵、
もったりとした肌に爪を突き立て
る罪悪と幸福。

これは何だかいってみなさい、
鉛筆であります、
らぴすであります、
からんだーしであります、
おそらく私でございました、
後付けの証明と共通認識。

何者にも妨げられはしない、
我が躍如たる自我の憧憬。

入選

僕と私で

神奈川県立川崎高等学校　一年
鈴木　僚介

夕陽を背にカラスが飛ぶ
手を伸ばしても届かない
虚しく空を掴むだけ
カラスも彼も置いていく

手が届くまであと一歩
そんな時、私の足は動かない
夕陽にすらも追い抜かれ
冷たい夜が追いかけてくる
それに紛れてカラスが消えた

追うべきものを見失い
初めて私は踏み出せた
遠い背中を追うよりも
ずっと楽しい　ずっと良い
誰かが側でささやいた

お前は本当に、弱りたがりだ
無責任な事言うなよ
良くないなんて分かってる
でも届かない、分かるだろ
出来る限りは追いかけた
もう諦めもついたんだ
入って来るな簡単に
お前は誰だ、出て行けよ

聞かなくたって分かってる
本当は、君は私だから
追いかけたいと願う私
叶わぬ夢を見る私
私の中にまだ残る強い私
君は私に手を伸ばす

もう一度だけでも良い
追いかけよう
仕方が無く、手を取った

気付けば既に夜も消え
朝日が僕を追いかける
朝日は僕を追い越して
また、夕陽になった
周回遅れのリスタート
でも大丈夫
今度はきっと追いつけるから

入選

止まらない〝時間〟

宮城・常盤木学園高等学校　二年
伊藤　朋香

ごろごろ
転がって〝何か〟が落ちて来る
支えて、受け入れ
一つ一つ積み上げて来たというのに。

ぐるぐる、ぐるぐる
回って回って〝何か〟が大きくなる
なにがなんだかわからない
自力で立ち、正そうとしたというのに。

みしみし
〝何か〟のせいで亀裂が入る
もう、すぐにでも壊れそうだ
フォローして、カバーして、修正して、
丁寧に繕っていたというのに。

ぼろぼろ
〝何か〟が崩れを加速させる
ちぎられては分裂を繰り返し、
組み合わせ、接着させ、
繋ぎ目を見つけていたのに。

がりがり、がりがり
削られ〝何か〟が見え隠れ
どんどん細かく消えてゆく
せっかく拾って、一から造っていたのに。

ぐちゃぐちゃ
その〝何か〟が滅茶苦茶にしていく
直そうと、治そうと、
糸で紡いでいたのに。

ひらひら、ひらひら
広く〝何か〟が散ってゆく
かき集め、掴もうと、掴めそうだと、
手を伸ばしていたのに。

ごろごろ、ごろごろ転がって
ぐるぐる回り
みしみし、みしみしと亀裂が入り
ぼろぼろ、ぼろぼろ崩れてゆく
がりがり削られ
ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃと音をたて
ひらひら粉々に散る

ほんの少しの乱れでも、その〝何か〟
〝何か〟が動き出したら
止まらない、止まれない

入選

オルゴール

岡山・津山工業高等専門学校　一年
草加　修宏

思う人がいたカナ
　なつかしい音がナル
　　ヒトつヒトつの音が
相手にはどのような音が鳴っていたのかな
　わからない
会いたいと思って、探すなんて
　ストーカーかよ
　　自分をいつも否定する
でも、探したくなる
　そして、走るケド
　　いない
そして、音も　　遠くに
　でも、アタマの中に
　　今、ながれる音
探してる、今も
探したけど、、、
　微かに耳を通り過ぎたけど
　　振り向いたケド
　　いたかな程度
いるわけがない
　だって、音と言う
　　見えないモノだもん

入選

部屋

佐賀・早稲田佐賀高等学校　二年
宮﨑　淳也

月も太陽もいつも真上
カーテンは両方から光合成する
机の上は通勤ラッシュ
ペンは個性豊かな涙を流す
辞書は今日もディスカッション
言葉の壁は話にならない
炭酸飲料は今日も奮闘
気を抜けないのはかわいそう
「本日、そらは快晴で風が強く吹くでしょう」
二十五度の風が吹く
壁はピンクと白でイノベーション
二人は離れず見守っている
段ボールは今日も沈黙
夜になるまでしゃべらないらしい
地震が来た
小さいはず
地震が来た
今度は大きい
ペンたちは家へ帰る
段ボールが口を開いた
色鮮やかな木が生えた
誰も履かない靴下も来た
机の上はいつの間にかろうそくとお城
それもゆっくりと崩されて
ベッドは今日もララバイを歌う

入選

献花

兵庫・灘高等学校　一年
森中　健人

一人のバレリーナが
七十億の視線の中で舞う
手を広げ
飛ぶように
飛び立つように
そのうるんだ瞳は
何を見つめるの
その乾いた唇は
何を歌おうとしているの
変な形の靴
気持ち悪い化粧
全部取り払って
ほほ笑むことは
もう許されないの
ロマンティックと
クラシックが
か弱い背中にのしかかる
彼女の名前は
リリー

入選

夏の果て

青森・八戸工業高等専門学校　二年
春日　朋佳

老いた人
ひまわり畑ではしわが目立つ
そこにいる
少女の口笛とミルクのたゆたい
そこにある
嘘と柔らかな毛玉
あなただけ
太陽を向いている

九月二日
予定より早い
一七時五七分の日没
ドラマチックが
二酸化炭素と蛙を吐き出す
残像はいつも
思い出す前に消えている

静まった町を
許された車が通り、過ぎて行く
それは
盆の手持ち花火のアーチが
闇を照らす三十秒
ふと
ひぐらしがいないと気づいた

現代詩の部選評

詩人
水無田気流

今回で、本コンテストは3回目の選考を務めさせていただきました。今年の現代詩部門への応募作品数は、１２６５篇と全回よりも若干減りましたが、高校の文芸部など集団で投稿というよりも、自分で情報を見つけて、という「一匹狼」タイプの応募者が目立ちました。集団に属さない分「腕に覚えあり」であるのか、全体的に作品水準が高く、嬉しい悲鳴を上げながらの選考となりました。

昨年は「言葉の表層と内実のずれ」を意図的に描いた作品が目立ちましたが、今年はそれに加え、そのずれを愉しむような技巧を駆使した作品が目につきました。言葉の内包するエモーショナルなものと、ファンクショナルなもののずれを、自覚的に際立たせているような良作が多々見られたように思います。

最優秀賞を受賞された藤井志穂さん「ながめの息を」は、詩を成立させる視点の立脚地点と、表象されるものとのずれから、ある種のおかしみを感じさせるような作品です。四連構成で、初連が最も長く、まさに「ながめの息」づかいなのですが、二連、三連とたたみかけるように短くなり、終連は一行で留める潔さが効果的です。「するり」「ごりごり」のようなオノマトペと、「あさやひる」「いのりはむなしく」のようにひらいた文字配りが、使用している無機質な単語と好対照をなし、有機的に立ち上るような印象を与えています。これ以上書いたらおそらく、冗長になる直前で切り取る潔さが清々しいですね。

優秀賞となった奥田由珠香さん「衷情」は、これも表層と内実のずれ、意識と無意識、価値と無価値の転換点に立つような、不穏さが魅力的な作品です。夕方という昼と夜の転換点に立ち、日常からすんなり非日常にはまりこみ、特異点のように立つ「何か」を眺める視点。「理解」して後に、逃亡する作者の視点は、異質なものに「踏み込む／踏み込まれる」ことへの原初的な恐怖、ないしは距離感の象徴でしょうか。夕日にはじまり、オレンジ色の地面に終わる象徴遣いが、さりげなく作品に色彩を与えている点も効果的です。

同じく優秀賞となった村上陽香さん「ひと言ぶんの等星」は、他の作品と全く異色ともいえる「明るい」「甘い」作品です。最優秀作と同様、初連が長く、一行づつ導入した独話体が、二人称の対象への接近性と、そこに成立するコミュニケーションの儚さを醸成しています。「七万色」と大仰な色彩を描写しつつ、まったく対照的な「小さな」星、「金平糖」などの時間の有限性を象徴する言葉を用いて、一見明るい風景と表裏一体の、一瞬の儚さを描いています。終連は通常、俗っぽくなりがちな一文ですが、なぜかこの作品の中ではすんなりと響く点も、不思議な魅力となっています。不穏な時代を描く作品が多数見られる中、印象的な作品でもありました。

今回は力作が多い中、初連ないしは終連が冗長な点が「惜しい！」と思う作品も、多々見られました。また、最優秀賞と優秀賞との間の実力差はほとんどなく、強いて言えばより言葉を選択し、それ以外のものを捨て去る思い切りの良さが、詩の強度と結びついた作品から、高評価になっていったように思います。現代詩に限らず、表現に最も必要なものは、捨てる「勇気」と、再確認させていただきました。

● 水無田気流（みなした・きりう）
昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。平成十四年から、水無田気流の筆名で思潮社の『現代詩手帖』に詩作品の投稿をはじめ、平成十五年に第41回現代詩手帖賞を受賞。平成十七年に『音速平和sonic peace』（思潮社）を出版、翌年に同作で第11回中原中也賞受賞。平成二十年、『Z境』で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、学術論文の執筆などを行うほか、評論に『シングルマザーの貧困』（光文社新書、平成26年）、『「居場所」のない男、「時間」がない女』（日本経済新聞出版社、平成27年）等多数。平成二十五年度朝日新聞書評委員に就任。平成二十八年四月より國學院大學経済学部教授。